

## 中国における入戸託育の実態に関する研究 — コロナ感染拡大の影響を踏まえて —

陳 映芄<sup>1</sup>・七木田 敦<sup>1</sup>

### Research on the realities of *Takuiku irito* in China, in light of the COVID-19 pandemic

Yingpeng CHEN<sup>1</sup>, Atsushi NANAKIDA<sup>1</sup>

**Abstract:** *Takuiku irito* is a small-scale decentralized caretakers' effort in which caretakers visit a target's home on behalf of the parents to care for the children. Because this is a decentralized nursing care service that has been developed by nursing facilities in light of the COVID-19 pandemic, the relationship with centralized nursing care facilities is closer. In light of this, it is possible to explore new possibilities for examining the relationship between distributed care and centralized care. In this section, we used interviews with persons in charge of private care facilities and sent questionnaires to households using *takuiku irito* to examine the relationship between distributed care and centralized care and the direction of their development to understand the reality, significance, and issues concerning private care facilities in China.

**Key words:** Decentralized nursing care service, *Takuiku irito*, relationship between distributed care and centralized care

### 目 的

本稿の目的は、入戸託育の実態を明らかにし、それに基づいて、その意義と課題を検討し、これからの方向性を考察することである。入戸託育とは託育師<sup>1</sup>が親の代わりに対象者の家に向いて子どもの保育を行う小規模分散型託育活動であり、主な対象は0-3歳の乳幼児である。樊、陈（2022）は託育形式を託育施設を、代表とする大規模の集中託育と入戸託育を包括する個人的分散託育に分けられるとしている。出生率の低下とコロナ感染症による不景気の影響で大規模集中託育施設への資金投入と規模拡大が停滞した。託育の需要に応えるために、衛健委<sup>2</sup>（2021）は個人的・分散型託育を含む多様な形式の託育の展開を奨励した。個人的・分散的託育の発展が奨励されるものの、支援は政策レベルに留まっている。個人的・分散的託育は関心

の欠如、サービス質の欠如及び託育供給システムにおける位置付けの不明瞭さなど苦境に直面し、発展はまだ不十分と言える。そのため、託育サービスの供給システムにおいて分散的託育と集中的託育をどのようにして位置付けていくべきか切実に考える必要がある（刘, 2023）。

また、コロナ感染拡大は乳幼児託育業界に託育募集の停滞、資金が回らないことによる倒産、託育サービスの需要の減少など多くの影響をもたらし、託育業界は危機に直面しているとも言える（範、李, 2020）。そのため、託育施設は積極的に転換を模索し、入戸託育という託育施設が実施する分散型託育を試みた。

入戸託育は大規模集中託育施設が行う個人的分散型託育である。集中託育を行う託育施設との関係性は互いに独立するのではなく、より緊密であることでその独自性があるのではないかと考えられる。本研究では分散的託育と集中託育の関係を考察し、託育体系構築に新たな可能性を模索することができるかと考える。様々な形

1 広島大学人間社会科学研究所

式の託育を奨励する背景のもとで、個人的分散型託育と大規模集中託育の協同発展を促す実践として、その実態についてさらに検討する必要がある。それと同時に、入戸託育の発展において、課題もある。

まずは入戸託育に対して、「実際の需要でなく、見かけ上の需要である」という評価がある。感染拡大をきっかけとして出現した入戸託育は2020年～2022年の間に迅速に発展し、特別な時期の対応として仕方なく多くの託育施設に採用された(斉2022)。しかし、感染が徐々に緩和されていく中で、入戸託育への批判が出てきた。斉(2022)は重要な要因であった感染症がなくなり、入戸託育の存続の必要性はなくなったように見えると述べている。この疑問に答えるためには、入戸託育の展開と実態及び存続する意義を検討する必要がある。

また、既存の入戸託育に関する資料は、託育機関の広告や新聞記事が中心で、関連する研究は少なく、サービス全体のイメージはまだ不明瞭である。そのため、入戸託育の実態の調査を行うことで、明らかなイメージを把握することが必要である。よって、本研究は入戸託育の実践に着目し、コロナ感染拡大と託育供給ギャップの背景を踏まえその意義と課題及びこれから発展の方向性の検討を行う。この知見は特に、託育サービス供給の解決策の模索と集中託育と分散型託育の関係考察に意義があるものになると考えられる。

### 研究協力者と方法

本研究では、北京、福建及び江蘇に位置する3つの託育施設(Z施設、A施設とB施設)が行う入戸託育を研究協力施設として、それぞれの担当者に入戸託育の実態(開始された理由と経緯、託育師の募集や研修、サービスの内容及び過程、保護者とのコミュニケーション、託育施設との関係など)をめぐる半構造化インタビューを実施し、入戸託育の内容、特徴及び託育施設との関係を明らかにした。

得られたデータを帰納分析し、文脈をいったん解体し、「脈絡のない情報の中に、隠れた文脈を事後的に発見することで徹底的にデータに語らせる」ことを追求し、更にインタビュー・データに潜在する意味をより深く解釈するために、インタビューの内容はうえの式分析法を用いて5つの手順(①カードの作成、②メタ情報の生成、③マッピングとチャート化、④ストー

リーティングと考察、⑤マトリックス分析)で分析した。

また、入戸託育の実態と展開を明らかにする上で、入戸託育が受けている「実際の需要でなく、見かけの需要である」という問題についてそこに存在する意義を検討するためには、サービスの利用家庭からのフィードバックが必要である。そこで調査可能な3園にアンケートを依頼し、3園のうち2園(Z、B園)の了承を得た。アンケートは入戸託育を利用する家庭600件以上を対象に、調査を実施した。アンケートによって、対象家庭の①基本属性(保護者の年齢、学歴、家庭年収範囲、子どもの数及び年齢など)、②入戸託育の効果、③入戸託育と他の託育形式との比較、④入戸託育に対する評価などを明らかにした。利用家庭の入戸託育を選んだ理由や利用の満足度、継続して利用する意欲などを把握し、入戸託育の意義や課題及びこれからの方向性を考察した。2023年10月～11月にかけて、ZとB施設の入戸託育を利用する家庭の保護者を対象としてアンケートを行った。回収数は104件であった。

### インタビュー結果と考察

各協力者のインタビューデータ分析によって、各施設の入戸託育の展開経緯と実施状況を説明するチャート図(図1～図3)とストーリーテリングを作成した。

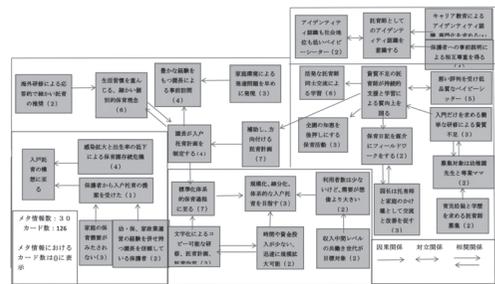


図1 A施設の入戸託育の展開のチャート図

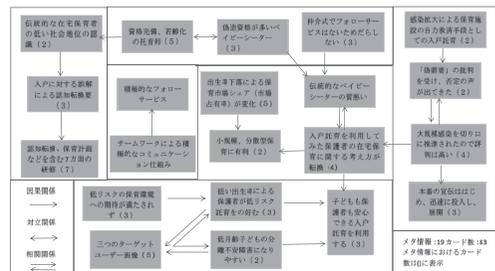


図2 Z施設の入戸託育の展開のチャート図

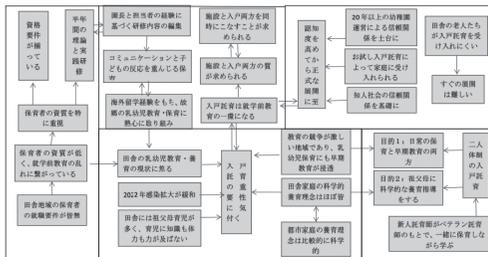


図3 B施設の入戸託育の展開のチャート図

各インタビューから得られたカテゴリーが他の調査協力者にも当てはまるかどうかを表4のように示し(マトリックス分析), 3つの施設の状況を合わせて入戸託育の実態と展開を説明する。

表4 マトリックス分析

カテゴリー	区分	カテゴリー名	協力者名		
			協力施設 A	協力施設 Z	協力施設 B
地区	地区	福州(都市部)	北京(都市部)	连云港(田舎地域)	
施設の規模	施設の規模	託育センター2軒を運営している	多店舗展開、合わせて13の都市で実施している	託育センターと幼稚園も運営している	
入戸託育を行ったきっかけ	感染拡大で登園児の減少	○	○	—	
	家庭の強い託育ニーズ	○	○	○	
	保護者の強い育児指導ニーズ	○	—	○	
	保護者からの入戸託育アドバイス	○	—	—	
初期の宣伝	施設の費用換算対策	—	○	—	
	託育施設の利用者からお試し利用	○	○	○	

入戸託育を行ったきっかけ	保護者が入戸託育を受け入れにくい、初期の宣伝は困難	—	—	○
	コロナ感染拡大を契機に展開	○	○	—
託育師募集要件	資格より経験の方が重視される	○	—	—
	乳幼児保育関連の資格を厳しく要求される	—	○	○
託育師募集対象	乳幼児・幼児教育専門の卒業生	○	○	○
	育児経験を持つ専業主婦	○	—	—
対象家庭	共働き世代	○	○	—
	高収入家庭	○	—	—
	祖父母育児家庭	—	○	○
	多見家庭	○	○	○
研修・支援の内容	乳幼児保育関連の理論と実践研修	○	○	○
	入戸託育師の職業アイデンティティ認識	○	○	—
	保育計画の書き方	—	○	—
	職業発展	—	○	—
	期間	一週間	一週間	半年
	ベテラン先生との連携	○	—	○

研修内容の決定	託育師の継続的学習を重視する	○	—	—
	園長や担当者が研修の内容を決定し編集する	○	○	○
サービスの内容	日常保育(ケア)	○	○	○
	生活習慣の養成	○	○	○
	早期療育	○	○	○
家庭とのコミュニケーション	保護者への育児指導	○	—	○
	託育師との直接的なコミュニケーション	—	○	○
	WeChatグループ	○	○	—
	園長や担当者を媒介に意見交換	○	○	○
	お客様サービスを媒介にコミュニケーション	—	○	—
	保育日記	○	○	○
家庭へのフィードバック	園長や担当者を媒介に	○	—	○
	お客様サービスセンターを媒介に	—	○	—
	施設の利用者から展開する	○	○	○
大規模集中託育施設との関係	研修は施設の場所や資料をもとにする	○	—	○
	施設全員の交流を後押しに	○	—	—

入戸託育を行ったきっかけ	入戸託育と施設によって就学前期の保育・教育を内包する	○	○	○
	施設利用者の信頼関係をもとに、二人目以後の保育を入戸託育にする	○	○	○
コロナ感染終息後継続的に存在する理由	既存の居宅保育の内容と質では家庭のニーズを満たさなから	○	○	—
	低月齢の子どもは施設より在宅保育が良いから	○	○	○
	ウイルス感染や健康を意識して	—	○	—
	敏感期の子どもの不適応を解消するために	—	○	—
	送迎の必要がなく、施設より便利だから	○	○	○
今後の発展	社区託育 <sup>1)</sup> と連携し、小規模託育への転換と併存	○	—	—
	対象者数の拡大を図る	○	○	○

○は当てはまるもの、—は当てはまらないものを意味する

入戸託育の展開順に沿って、開始したきっかけ、初期の宣伝の様子、託育師の募集などを含んで質問の項目を作成し、それを手がかりとして半構造化インタビューを実施した。また、質問項目と各対象者の回答を踏まえて、質問項目を添削し、最終的に12項目にまとめた。各項目の下に関わる要件を抽出し、カテゴリー名を作成し、それを手がかりに実態を考察した。①入戸託育を行うきっかけは、新型コロナウイルス感染拡大の影響を踏まえて、託育施設が登園停止によって倒産の危険性に迫られると同時に、長い間存在している家庭の乳幼児託育のジレンマが顕在的になっている。②入戸託育の初期の宣伝は、

認知度が低いため、最初は困難であった。そのため、認知度が高い施設の信頼基盤に依存する姿勢が見られた。③保育師の募集要項については託育師全体の若齢化、資質重視の傾向が示すが、公的規範の欠如により要件にはバラつきがある。④託育師の募集対象について、施設ごとに資格重視か経験重視かといったバラつきが見られる。⑤ターゲットユーザーは共働き世代、二児家庭及び祖父母育児家庭である。⑥初任者の研修・支援については、託育師の身分認可が重視され、内容の決定は経験に基づくことが多いという特徴が示され、公的な基準の欠如によって園の裁量に委ねられていることが多い。⑦サービスの内容は乳幼児に対する日常保育や早期教育<sup>3)</sup>以外に、保護者向けの養育指導が重視される。⑧家庭とのコミュニケーションについては、緊密なコミュニケーションはサービスに間接的に影響を与えるという特徴が示される。⑨家庭へのフィードバックについて、入戸託育サービスは保護者の意見を重視し、保育日誌や園長とのコミュニケーションなどを通じて意思疎通を行う。⑩入戸託育と託育施設の関係については、緊密な依存、補完とサポートの関係を示している。⑪コロナ感染終息後も入戸託育が継続的に存在する理由として、質の高い在宅託育の保障が挙げられる。⑫入戸託育の今後の発展について、託育ネットワーク（託育施設、ベビーシッター）の一環でありながらもより専門的に細分化された託育を提出していきたいと考えられる。

## アンケート結果と考察

アンケートの目的は利用家庭の利用実態、入戸託育に対する見方及び評価を明らかにすることである。アンケートの結果は表5のように示す。

表5 アンケートの結果

n=104

項目	選択肢	人数 (%)
回答者年齢	20-30	52(50%)
	30-40	44(42.3%)
	40-50	5(4.8%)
	50以上	3(2.9%)
学歴	学卒(4年制大学)	75(72.1%)
	高卒(専門学校)	19(18.3%)
	院生及び以上	9(8.7%)
	高卒以下	1(1%)
共働き世代	はい	95(91.4%)
	いいえ	9(8.7%)

子どもの数	2人	55(52.9%)
	1人	34(32.7%)
	3人以上	15(14.4%)
家での主な育児者 (複数回答)	母親	63(70%)
	父親	20(22%)
	祖父母	5(5.6%)
	ベビーシッター	1(1.1%)
家庭の年収範囲(円) <sup>4)</sup>	20万以下	71(68.3%)
	20-50万	25(24%)
	50-100万	6(5.8%)
	100万以上	2(2%)
入戸託育を受ける子どもの年齢	8ヶ月以下	11(10.6%)
	8ヶ月-1歳	10(9.6%)
	1-1.5歳	38(36.5%)
	1.5-2歳	21(20.2%)
	2-3歳	16(15.4%)
3歳以上	8(7.7%)	

項目	選択肢	人数 (%)
入戸託育を知ったルート (複数回答)	①保育施設のおすそめや広告	83(79.8%)
	②ネットの紹介や広告	64(61.5%)
	③ママ友	43(41.4%)
	④家族や知人	40(38.5%)
利用する理由 (複数回答)	①祖父母育児、科学的養育の理念の欠如や力がおよばない	(75%)
	②ベビーシッターの質の低さ	(73.1%)
	③子どもの個別的な状況に応じる保育が欲しい	(73.1%)
	④子どもの身体的抵抗力が低く、ウイルス感	(65.4%)

毎月の価格(円/月) <sup>5)</sup>	⑤子どもが月齢が低く、外出は不便、家での保育が安定的	(60.6%)
	⑥低い月齢の保育をする施設が少ない	(54.8%)
	⑦施設の保育には不満がある	(36.5%)
	⑧子どもを面倒を見る時間がない	(28.9%)
	⑨サービスが良い	(11.5%)
	⑩時間の融通が柔軟的	(11.5%)
	⑪コースに応じるサービス内容を設定できる	(10.6%)
	⑫専門的な育児者の指導や支援が欲しい	(5.8%)
	3000以下	9(8.7%)
	3000~5000	52(50%)
	5000~7000	29(27.9%)
7000~10000	11(10.6%)	
10000以上	3(2.9%)	
入戸託育をするとき保護者の状態	仕事で不在	62(59.6%)
	在宅、保育に参加しない	32(30.8%)
	在宅、保育に参加	10(9.6%)

入戸託育を受ける前後で子どもはプラスな変化の有無	はい	87(83.7%)
	いいえ	10(9.6%)
	分からない	7(6.7%)
子どもの具体的なプラスな変化 (複数回答)	①性格、個性の発展	79(77.5%)
	②趣味開発	69(67.7%)
	③社交力の発展	65(63.7%)
	④良い生活習慣の養成	47(46.1%)
	⑤体力が増強された	44(43.1%)
	⑥言語能力の発展	29(28.4%)
	⑦運動能力の発展	21(20.6%)
入戸託育を受ける前後で保護者のプラスな変化の有無	はい	96(92.3%)
	いいえ	5(4.8%)
	分からない	3(2.9%)
保護者の具体的なプラスな変化は (複数回答)	①育児ストレスの軽減	89(88.4%)
	②育児における無力感や不安感の緩和	81(78.6%)
	③子ども保育に関する理解や知識の増加	79(76.7%)
	④家族の育児参加度が増加	75(72.8%)
	⑤親子関係の促進	72(69.9%)

改善すべきだと思う ところ (複数回答)	①保育計画の内容や時間区分が 不十分	101(97.1%)
	②託育師の指導やアドバイスが 曖昧的、有効ではない	75(72.1%)
	③内容が家庭のニーズに満たさ れず	69(66.4%)
	④託育師が親切でなく、家庭との 信頼関係が薄い	45(43.3%)
	⑤子どものプラスな変化が顕著 ではない	31(28.8%)
	⑥緊急状況への対応がうまくで きなかった	27(26%)
	⑦子どもの個別的な状況への指 導やアドバイスは不足	13(12.5%)
	⑧託育師の専門性が不足、子ども の状況に対応できない	12(11.5%)
	⑨託育師からの積極的なコミュ ニケーションが不足	10(9.6%)
	⑩ない	1(1%)

項目	選択肢	人数%
入戸託育とベビー シッター育児の違いが あると思いますか	はい、利用する目的が異なる	96(92.3%)
	いいえ、同じく家での託育である	8(8%)

両者の違いは (複数回答)	①託育師は育児の面でもっと専門 的である	95(93.1%)
	②託育師は家事代行はしない	78(76.5%)
	③託育師は保護者に育児指導を行 う	57(55.9%)
	④入戸託育は「フォロワー」がある	44(43.1%)
	⑤託育師の資質はベビーシッター より高い	36(35.3%)
	⑥託育師とのコミュニケーション はより緊密的	33(32.4%)
	⑦入戸託育は子どもの保育や成長 により専念する	27(26.5%)
	⑧入戸託育の価格はより安い	19(18.6%)
	⑨入戸託育は早期教育の内容を行 う	15(14.7%)
	⑩入戸託育は保護者の育児スト レスをより緩和する	2(2%)

施設保育と比べて、入戸 託育のいいと思うところ (複数回答)	①低い月齢の子どもは家での 保育の方が安心である	96(92.3%)
	②送迎がいらす、便利である	81(77.9%)
	③一対一で、子どもの状況に 応じる保育	59(56.7%)
	④早めに子どもの発達問題 を発見できる	55(52.9%)
	⑤専門的な託育師の指導や アドバイスによって有効な育 児指導	38(36.5%)
	⑥保護者の育児への自信を 支える	31(29.8%)
	⑦託育師と保護者の関係が 近くなり、育児仲間になる	7(6.7%)
施設保育と比べて、入戸 託育が不足だと思うところ (複数回答)	①価格が高い	100(96.2%)
	②託育師の資質への要求が より高い	72(69.2%)
	③子ども同士とのコミュニケー ションができて、社交力が発展できな い	69(66.4%)
	④家庭は施設のような大き な教具や活動スペースがない	58(55.8%)
	⑤託育師との信頼関係作り に時間をかけなければならない	15(14.4%)

入戸託育の効果は期待通 りですか	ほぼ達成	58(55.8%)
	完全に達成 一部達成 達成できなかった	33(31.7%) 10(9.6%) 3(2.9%)
これから引き続き利用す る意欲の有無?	はい	92(88.5%)
	いいえ 分らない	9(8.7%) 3(2.9%)
引き続き利用したい理由 (複数回答)	①サービスの質が良く、保護 者の育児ストレスを緩和する	71(68.9%)
	②子どものプラスな変化が顕 著	63(61.2%)
	③保護者は有効な育児指導が 得られる	61(59.2%)
	④子どもの月齢が低い、保育 園や幼稚園に行く年齢まで引き 続き利用する	54(52.4%)
	⑤子どもの抵抗力が低く、ウ イルス感染を避けるため	40(38.8%)

今後利用したくない理由 (複数回答)	①子どもの成長が顕著ではな い	8(28.6%)
	②価格が高すぎる	5(17.9%)
	③託育師の資質が不足してい る	5(17.9%)
	④有効な育児指導が得られな い	5(17.9%)
	⑤保護者の育児ストレスが緩 和出来ない	4(14.3%)
	⑥子どもが保育園や幼稚園に 登園できる年齢になる	1(3.6%)

アンケートの考察によって、明らかになった点は以下の通りである。

一点目は、入戸託育の利用実態である。利用者家庭は2歳未満児と二児以上家庭が中心である。価格は、施設託育に比べて割高であるが、同じ在宅託育のベビーシッターと比べて割安である。一般の育児家庭にとっては、依然としてかなりの支出となっていた。利用者の多くは、集中型施設での託育から分散型託育に移行してきた。移行の理由について、コロナ感染症の拡大による登園停止に加えて、「施設託育では十分に満たされていないニーズを補う」と「ベビーシッターの質の低さ」という考えが見られる。

二点目は、入戸託育に対する見方である。入戸託育には煩雑な日常保育や教育を担うとともに、親子関係の促進に向けた教養指導を提供することが期待されていることが分かった。保護者にとって、入戸託育がもたらすプラスの影響は主に①育児ストレスの軽減、②育児知識の増加、③親子関係の促進という3つがある。入戸託育と他の託育形式との比較について、利用する目的と仕事内容の面において、ベビーシッターとは大きく異なっている。入戸託育を行う託育師は育児に関わることに専念し、家庭とのつながりを深めていくことが見られる。また、託育師は保育者だけでなく、育児専門家として家庭の育児の指導者、協力者の役割も担ってい

る姿勢が見られる。施設託育との比較について、「子ども同士とのコミュニケーションが不足する」と「施設のような大きな教具や活動スペースがない」など懸念が多くみられた。改善すべきところについて、保育計画の内容と託育師とのコミュニケーションへの不満が多く、入戸託育の託育実践はより保護者の意見を汲み取り、共同で保育計画を作成する必要性が示された。

三点目は、入戸託育に対する評価である。既存の在宅託育サービスの形式はベビーシッターの一つしかなく、そして普遍的で低い質の状況であった。入戸託育はより高い品質や家庭の需要に合っているなどの特徴があり、一定の需要があることが示された。入戸託育を利用する上での主な問題は、サービスの質の保証と価格である。そのため、一部の家庭では入戸託育を選択する際に懸念があることが示された。

### 総合考察

インタビューデータとアンケートの結果を踏まえて、入戸託育の実施と利用する実態、存在する意義や課題とこれからの方向性を考察した。具体的には以下の点が示された。

一点目は、入戸託育の実態である。コロナ感染拡大は託育施設と家庭両方にマイナスな影響を与えた。託育施設にとって、登園停止によって倒産の危険性に迫られた。家庭にとっては、託育施設の選択肢が少なくなり、育児無力感や育児孤立感、育児には力が足りないなどの苦境に陥った。託育施設と家庭両方のジレンマに対応するために、入戸託育が展開されることとなった。入戸託育は、家庭と託育施設両方の期待を担っている。保護者にとって、育児ストレスの軽減と利便性、そして、有効な育児指導の2つがある。託育施設にとって、入戸託育は停滞した経営を改善するための重要な試みである。入戸託育を順調に展開するために、託育施設は、宣伝、託育師の募集、研修と支援、家庭側とのコミュニケーションなど工夫をした。宣伝について、入戸託育は託育施設の認知度と信頼度に依存し、認知度を高めて利用対象を段々に拡大させる様子が見られた。また、託育施設は入戸託育を行う託育師の質を重視した。専門的資質や育児経験者を狙って募集、託育施設内で理論と実践両方の研修の実施、託育師の質保障とキャリアアップを重視する姿勢が見られた。さらに、託育施設において積極的に各種の手段によって託育師の仕事を補助し、後押しす

る様子が多く見られた。

二点目は、入戸託育の意義と課題である。入戸託育は家庭と託育施設にそれぞれにポジティブな影響を与えている。乳幼児育児家庭にとって、入戸託育はコロナ感染拡大時期の託育問題を解決し、家庭の育児ストレスを軽減した。託育施設にとって、コロナ感染拡大期間における経営苦境に対応したと共に、これらの託育の発展に新たな手がかりを提供した。しかし入戸託育の実践が展開されていくにつれて、課題も出てきた。託育師の質保障について、各施設は託育師の職前研修を行ったとは言え、ある程度の恣意性が含まれることとなった。入戸託育の保育計画の決定は託育師や施設の一方的な意識によることが多く、家庭の意見や思いはそれほど参考にされていなかった。また、保護者と託育師の間の信頼関係を作りにくいことが見られた。価格について、入戸託育の価格は一般的な乳幼児育児家庭にとっては、依然としてかなりの経済的負担であるとも言える。入戸託育の監督について、管理や監督部門の欠如によって今の段階では自由放任の状況に過ぎず、その質と発展は各施設に任せている場合が多い。

三点目は、入戸託育の位置付けと発展の方向性である。今回の検討において入戸託育と託育施設は託育サービスの両側面であり、両者は同じ主体（託育施設）が主導し展開する託育活動であった。既に成熟した託育施設が施設と入戸託育の両方を同時に運営することで、潜在的な競争関係が協力及び補完関係に転換し、両方の発展を促しながらさまざまな託育ニーズに同時に対応し、さらに細分化された形で潜在的な託育ニーズを掘り起こすことができると考えられる。入戸託育は多様な託育ニーズに対応し、潜在的な託育ニーズを掘り起こす試みである。今後は更に細分化、専門的な託育ネットの一環になることが期待されている。しかし、管理規範や制度の欠如、託育師やサービスの質が保障できない、価格が高いなどの問題をうまく解決しなければ、時代から取り残されていく可能性があるかもしれない。入戸託育の発展を追求するためには政府のトップダウンの設計、制度や管理への注目が求められ、更に充実した運営体制を整える必要がある。

本研究の限界と課題として、アンケートによって検討した利用者家庭の実態について、各施設の利用者数の差があるため、収集されたユーザーデータは北京の施設が中心であり、福

建の施設はアンケートの許可を得られなかったため、この部分の利用家庭のフィードバックが不足している。これが本研究の限界である。今後は対象や範囲を拡大し、入戸託育と託育ニーズの相性を更に検討し、目の前の託育の難題を緩和するために、どのような改善策や政策支援が必要の検討を行う必要がある。

### 注

- 1) 託育師とは0-3歳の乳幼児の託育と教育を行い、乳幼児の生活世話と早期発達の支援をする人員である。(秦, 朱2023)
- 2) 衛健委: 健康衛生委員会, 衛生と健康の事務を主管する構成部門で、乳幼児の託育もその管理範囲内にある。
- 3) 早期教育とは0-3歳乳幼児向けの身体動作(微細運動, 粗大運動), 言語能力, 社会性, 情緒, 認知, 芸術, 生活習慣などを含む9方面の教育内容である(于, 王, 肖2023)。

### 引用文献

- 2023年中国托育行业发展现状及行业投资潜力预测报告  
[https://m.sohu.com/a/631667609\\_120942209?\\_trans\\_=010004\\_pcwzy](https://m.sohu.com/a/631667609_120942209?_trans_=010004_pcwzy)
- 艾媒咨询(2023)「2022-2023年中外婴幼儿托育市场运行数据及趋势报告」  
<https://www.tuoyuwang.com.cn/article-detail/WJ8ow72B>
- 范明丽, 李聪聪(2020)「新冠肺炎疫情下托育机构发展的挑战及应对」教育观察2020年4月第9卷第16期6-25

- 国家卫生健康委流动人口服务中心课题组(2021)「家庭式託育: 现状, 规制困境与政策建议—基于北京市“民居园”的调研」社会治理. 2021年第4期. 52-58
- 康传坤, 赵书晨, 李欣桐(2023)「0-3岁婴幼儿託育服务: 现状, 使用与效果」山东财经大学学报2023年第35卷第3期. 75-85
- 刘中一(2022)「从奶妈, 保姆到育婴师: 私人托育的历史演进」河北学刊2020年7月第40卷第4期. 191-197
- 刘中一(2023)「私人还是公共: 我国托育服务体系供给范式研究」内蒙古社会科学2023年9月第44卷第5期182-189
- 秦旭芳, 王楠(2018)「我国婴幼儿託育师角色定位与职业发展规划」天津师范大学学报(基础教育版)2018年10月第19卷第4期. 78-82
- 齐胜(2022)「上门早教, 入户托育, 伪需求」托育星球  
 2022-03[https://m.sohu.com/a/529514383\\_120364951?\\_trans\\_=010004\\_pcwzy](https://m.sohu.com/a/529514383_120364951?_trans_=010004_pcwzy)
- 徐浙宁(2015)「早期儿童家庭养育的社会需求分析」当代青年研究2015年9月总第338期第5期. 25-30
- 郁琴芳, 张晓峰(2022)「疫情危机下家长养育压力的透视」现代基础教育研究2022年6月第46卷. 14-25
- 赵雷(2022)「3岁以下婴幼儿託育服务存在的问题及建议」公共关系论坛. 23-25
- 中国婴幼儿托育市场现状分析与发展战略报告(2023-2030年)  
<https://www.163.com/dy/article/I5VNLPOC0518H9Q1.html>